

縁があり、静岡県立佐久間高等学校で働くようになった。40歳代、月日はたち44歳のころクモ膜下出血で入院、退院してきて仕事をするようになり、その年赴任してきた校長先生が、今までの朝読書を、教師・生徒だけでなく、事務室にも行ってほしいとの話があった。事務室は朝の10分間は静かに読書をするようになった。しかし、当時の声の大きな事務長は、朝から怒鳴ることが多かった。そんなとき校長先生に「10分間だけは」と注意されていた。

佐久間高校で私が出会った事務長は、オツパイ好きの事務長とジュビロ大好きな事務長で、その次の野球好きの事務長だった。野球好きだから良い事務長だろう。そうジュビロ大好きな事務長に言われていたけど、だいぶ変わった人だった。

そのときの朝読書が、自分の読書習慣を、本を読む楽しさ感じさせたのだと思う。また、森町三倉「勉強会」での「修身教授録」の読書会、そこでの「尚友（しょうゆう）」という言葉、その意味は、書物を読んで昔の賢人を友とすること。朝礼での学校でも読書を進めている。テリー伊藤さんのイジメられているのなら図書室で本を読みなさい。イジメなどと下等な奴らとは違う知識を付けなさいと言っている。

静岡県市町村駅伝、その駅伝は有志での参加となった。夜は駅伝の練習を見に行った。その次の年、佐久間町は浜松市に合併するという。

佐久間町の役場の職員が、半場の区民センターに、その合併の説明に来た。収入役であるササキさんの説明は佶屈贅牙で分かりにくかった。次のクラノスケさんの説明はパソコンでパワーポイントを使い、私みたいなノータリンでも分かりやすく説明してくれた。

「最初は北遠だけでの合併を希望していたのだけど・・・」と、男女の恋愛を例えにして「嫌われている人に、いくらアプローチしても恋は成熟しませんでした。そのとき浜松の方から一緒になってほしい。との熱烈なラブコールがあったのです。そして佐久間町は浜松市への合併を決めました」と言っていた。また、静岡市に合併した井川地区の工事の進んでいない道路・公共施設の写真を区民センターに集まった人に見せ。

「いずれ佐久間町も、こうなるでしょう」と。まるで他人事のように言っていた。

その会合の帰り暗い夜道で、イシモトさん私で帰って来る途中、そのイシモトさんが合併の話私に熱く語っていた。私は話の腰を折り、静岡県市町村駅伝の話をした。そのイシモトさんは怒った。

「こんな時に駅伝なんか」と。

職場の仕事を半日で終わり、徒歩での帰り、佐久間病院前を歩いていたら佐久間中学校時代の同級生、キンパンに出会った。「大丈夫か」と言われ話しこんだ。そんなとき佐久間中学校の同窓会の話がでたのだった。

丁度、佐久間町は来年合併がある、そんな時45歳になる私たちが佐久間中学校同級生の同窓会を地元でやる。それは意味あることではないか、と。それからは5年ごとにやる、それを地元佐久間町で、如何だろうか。合併し佐久間町はますます衰退するだろう。5年に一度くらいは佐久間で賑やかく昔を懐かしむ同窓会は、如何だろうか。佐久間中学校は、いや佐久間町はいつか無くなるかもしれないけれど、今まで佐久間町には多くの人がいた。佐久間町を故郷に持つ人を集めて同窓会、やるだけのことはやってみよう。

1975年に佐久間中学校を卒業した人の同窓会、それは、そんな出会いから始まった。病み上がり、走ること自転車に乗ることはできないけれど、そんな時、自分のやれることを見つけた。

私は仕事の帰り、中部（なかべ）のミーヤンの家を訪ねるようになった。同窓会の話は少しずつ進んで行った。歯車が回りだした。

走ることも、少しずつ、始めた。ツツジの花が散り天竜川にアユ釣りの釣り人が竿を出す頃、佐久間の夏が始まる。私は佐久間小学校の体育館に顔をだし空手の先生に練習の再開を御願いした。少しずつ少しずつ身体は回復している。

佐久間中学校の同窓会、そんな招待状を書いた。会長はミーヤンにした。中部（なかべ）の夏祭り。同級生が集まっている会所に、それを持って行き、これで良いかと聞いてみた。会費はどのくらいがいいかも聞いてみた。

男性7000円 女性5000円と書いてはみたが？

マキノ 「30年ぶり一万円が切りがいい。女でも酒豪がおるゾ」

リュウジ 「チョット字が小さいナ、老眼が多いから、もつと字を大きく」

マキノ 「後はベンちゃんに任せた、何かやることがあれば何でも言つて」

そのような会話があつて、私たち地元で暮らす者は、1975年に卒業、二十歳のころ成人式を終わつてからの佐久間中学校同窓会をやつた。それから25年ぶりの同窓会に向けて、45歳の同窓会に向けて、佐久間地域を歩き進んでいくのだった。

城西地区は城西の同級生ヨックンと廻つた。野田。芋堀・城西・切開・島・横吹・立原・相月、招待状のハガキを配つた。私たちの親世代は、まだ若かつた。

佐久間地区を一人で廻つているときに、フツサの家を捜した。確かこの変だつたと目星を付けて、階段を上つた、その家の玄関に苗字が書いてある。たぶん、ココだろう。チャイムを押すが、誰も出てこない。

「オーっ誰かいませんか」「……」やはり、誰もいなそうだ。

家の郵便ポストにハガキ入れて帰ろう。そう思っていると畑仕事から帰つてきたであろうか、私の母親からの年齢の女の人が、あねさんかぶりの手ぬぐいを下ろし、額の汗を拭き拭き、その家にやってきた。

「あゝ〇〇さんのお宅ですか？」「来年佐久間中学校の同窓会をやることになって、案内のハガキを持ってきました」すると、その私の母親と同じくらいの人は、言った。

「息子は去年死んだ」と。その人は悲しそうな顔をした。

私は、言葉を失つた。何故、と思つた。まだ若いのに。とも。

フツサの中学校の時の思い出は、はにかんでいるような笑顔だった。目が少し悪いような感じがした。それは小さなとき、子ども同士での遊びで、そうなつたと聞いた。

去年の春、仮設の佐久間病院で「俺死ぬのかナ」と思つたことがある。しかし私は死ななかつた。生きて佐久間に帰ることができた。フツサは死んだ。私は生きている。クモ膜下出血があつた、あの人は死んだ。私は生きて戻つてくることができた。新聞徳一は戦争で死んだ。弟である剛は結婚をした。私が生まれた。44歳の私は今生きている。生きている、生きている。これからも・・・これからも生きたい。しかし、それは分らない。

確実に言えることは、それは何時か確実に死は来る。ということだ。

佐久間中学校同窓会、郵便局で貯金通帳を作つた。名前は佐久間中学校同窓会75とした。75とは1975年という意味、1975年の佐久間中学校の卒業アルバムに写っている人たちの貯金通帳という意味だ。

毎年2月、天竜杉の里マラソンがあつた。毎年、それに参加していた。ユキは、このマラソンと共にスギ花粉症が始まると言つていた。浜松市が広域合併をしようとしている平成17年、その杉の里マラソンは終わりを迎えた。そして、その杉の里マラソンと時期を同じにして、浜松シティマラソンが始まると言う。申込用紙が私の下に届いた。軽くジョギングは再開したがマラソン大会は止めよう、そう思つて、その申込用紙はゴミ箱へ捨てた。

同窓会のハガキを送つてから少し経つた夕方、携帯の着信が鳴つた。佐久間中学校時代の同級生からだ、なつかしい名前、なつかしい声、脳裏に当時の顔が浮かぶ。電気設備の会社を経営している人、大工を棟梁として活躍している人、スズキ自動車・本田技研・学校の先生、職業は様々だった。

45歳や44歳、まだまだ働き盛り、同じ年の仲間は、どんな暮らしをしているだろう。

そんな年の春、小泉首相が北朝鮮を訪問。平壤で、日朝首脳会談が行われ。拉致被害者の家族5人が帰国した。北朝鮮は拉致を認めた、日本国民をさらって行ったことを認めた国なのだ。日本人の一人として、被害者を返してほしい。そんな気持ちを表すことは大切な事だと思う。

また、その年に市町村駅伝と一緒に練習した仲間、ラン友のマルちゃんが白血病になり入院したと、朝のジョギングのとき井出君に聞いた。ウソだと思った。少し前、一緒に走っていたのに、本当だった。入院先の浜松医大にお見舞いに行ってきた。そして、その夜ネットで検索し、静岡県骨髄バンクを推進する会を知った。

「命のアサガオ永遠に」そんな本を知り、丹後まみ子さんの講演を、その会で聴いた、丹後光佑君の命からの繋がりを知った。今現在多くの若い人の骨髄バンクの登録者がいる、ことを知った。

大切なことなので、もう一回繰り返します。

- ① 拉致被害者、日本人として戦争はしないけど、被害者を返してほしい、という意識は持つべきだと思う。
- ② 骨髄バンク、登録は55歳まで。多くの若者がバンク登録をしている。登録できなくなった年齢からの生き方を考える。こと。
そんな思いがある。

2004（平成16）年そんな年も年末を迎えようとしている、

12月第一土曜日、静岡県の市町村駅伝が行われる日、芋堀のマーボーと、その応援に行った。マーボーは来年行われる第一回の浜松シティマラソンを走るという。私は行かない、と答えた。けど心の中で走ってみたい、との思いがあった。年末の寒くなり始めた佐久間の街で、風に吹き飛ばされたクシャクシャの紙切れが私の足にまとわりついた。その紙を拾い、そして広げると、第一回浜松シティマラソンの申込用紙だった。もう一度走りたい。もう一度大会に参加したい。そのクシャクシャだった申込用紙に、住所と名前を書いて、ハーフマラソンの場所に丸を付けた。

2005（平成17）年1月2日佐久間中学校同窓会75、浦川の清流荘での同窓会だ、城西方面から清流荘のマイクロバスで参加する人を拾っていく、リュウジが、そのバスに同乗してくれるという。ユキが半場の私の家に来て私たち二人は辰美屋で酒を買って清流荘へ出かけた。日陰にある清流荘には去年、振った雪が残っていた。

ミーヤンやコウケツなどは受付の準備をしている。

テレビで箱根駅伝のスタートの様子が映しだされた。同窓会の参加者がひとり、またひとりと集まりだした。25年ぶりにみる顔、老けたな〜と思った。飯田線でココに来たという恩師が居た。豊橋から乗車したとき、ある人が同じ車両に居たと、その同じ車両に居た人が、上市場駅で下車して初めてジョーカーだと分かったそうだ。恩師の先生は、笑って、そんな話を私に話してくれた。

みんな集まっただけの記念写真は半場のイサミ写真館に御願ひした。
会が終わる最後に

「五年後、またこの会場で会いましょう」と言って同窓会は終了した。

平成17年、佐久間町が浜松市に吸収合併される年、佐久間中学校同窓会75は無事に終わった。
そして、最後、参加した人に送った。

2005年平成17年 1月2日同窓会参加者の皆様へ



佐久間中学1975年卒業生一同 2005. 1. 2



拝啓 寒さ厳しき季節、皆さんは風邪などひかず、お過ごしでしょうか。

さて、先日の1月2日の同窓会への参加、ありがとうございました。いかがでしたでしょうか。月日は早いもので、佐久間中学校を卒業してから30年、成人式から25年たち、久しぶりの再会の人も多かったことと思います。

事務局としては、去年の夏ごろから、卒業アルバムを見ながら、計画を立て、案内状のハガキを作り、佐久間に住んでいる卒業生で、そのハガキを実家の両親に渡したり、携帯電話で住所を聞いたりして、連絡を取りました。

45歳といえば仕事や家庭などにおいて忙しい時期だと言うことで、参加できないという人もたくさん居ましたが、卒業生45人、先生2人と集まっていただき、楽しい同窓会になったのではないのでしょうか。

(深〇先生は参加できないとの連絡があり、ご祝儀を頂きました)

そこで、この封筒には、同窓会に参加した同級生と参加できなかった人で住所を教えてくださいました人の住所録その他を同封しました、大切な個人情報ですので、取り扱いには十分注意してください。

と、参加者の皆さんに送った。

私が、「俺死ぬのかな」と思った春、その次の年のお正月に、計画した佐久間中学校同窓会75は終わった。

私が、「俺死ぬのかな」と思った春、その年の年末、静岡県市町村駅伝は、有志の人たちでの協力で無事に佐久間町のユニホームを着た人たちは、静岡市の市内を走ることができた。

2005年平成17年が始まった。佐久間町が浜松市に吸収合併される年だ。その年の春にはJR福知山線脱線事故があった。

また、しっかりした飲みごたえなのに後味スツキリのキレの良さが特徴の、発泡酒キリンのどごし生がヒットした年でもある。

「俺死ぬのかな」と思った、次の年の2月、私は走る仲間、マーボーと第一回浜松シティマラソンを走りに行くため、西渡の待ち合わせ場所に車を走らせた。まだ辺りは薄暗かった。

マーボーの車に荷物を詰め込み、その車で152号線を南下した。瀬尻の辺りで雪に化粧した朝焼けの竜頭山が私たちを見守っている。「頑張ってこいよ。」そんなふうに言っているように、感じた。

目に見えない者に、分からない者に、私は、私たちは生かされている。

遠鉄電車、西鹿島駅前に車を置いて、その電車で上島駅まで、そこから四ッ池公園まで徒歩、ジャージを着たランナーが徐々に増えてくる。受付を終え、陸上競技場へ入る。久しぶりに感じる、この感覚。青空のもと、人並みの向こうの観覧席にユキの甲高い声が響いた。そこにはユキ手作りの「さくま」の横断幕があった。聖隷三方原病院を退院したときに携帯で電話した中川さんの姿も、そこにあった。

陸上競技場の第四コーナー、ハーフマラソン参加のランナーは集まっている。ランナーの声、湿布薬の匂い。私は一番後ろで人ごみに紛れ込んだ、近くにいた中川さんに近寄り話をした。

「ユックリ行きます」「無理せんよ」

ピストルの音とともに、その集団がユックリ進みだす。その群れは、四ッ池の陸上競技場を出るころには、ばらけ、押し出される。中川さんの姿は前方にランナーの陰で隠れ消えていく。私は自分のペースで進み、走る。自分の身体は、今どうなっているのだろう。心配なことはある。しかし、今は走れている。そんな仲間と、ゴールという目標に向かって走っている。本田技研の前、直線の道路、遠く遠くの上空に、新聞社のヘリコプターだろうか、ホバーリングをしている。10kmを折り返してくるエリートランナーの団体にすれちがう。ゲストランナーの増田明美さんも走って来る。沿道で「結婚おめでと

う」の声援がある。

折り返し、最後の坂道を下っているとき、マーボーが疲れたみたいでペースが落ちていた。声をかけ私はゴールを急いだ。何事もなく、ただ、ただ無事にゴールに辿り着くことができたことに感謝だ。振り向けば、後ろにはマーボーが居た。頭を垂れ進んだところでボランテアにチップを外してもらった。そこには肩で息している中川さんが居たユキも居た。

2005年浜松シティマラソン ハーフの部 1時間42分18秒

2005(平成17)年7月1日

浜松市は12市町村を飲み込んで日本で2番目に大きな市になった。

長女は高校3年生、長男は高校1年生、次女が中学2年生、育ち盛りの子どもたちの食欲は旺盛だ。休みには浜松市の市街に食料品を買いに行くのが常だった。

7月2日土曜日、その日も暑い快晴の日だった。西渡の交差点を右に曲がると、リックを背負って走っている何人かのランナーを見かけた。大輪の自動販売機でも一人のランナーが飲み物を買っていた。子どもが、その誰かに手を振った。

車は、そのまま都田テクノまで走り、肉市場の駐車場に止まり、私たち家族は肉市場の店内の列にまみれ買い物だ。あれも、これも、必要なものが沢山ある。一週間分のまとめ買い。そこで、ある商品に、私が出そうとすると。

「ちょっと待て」そんな声が私の耳に囁く人がいた。誰だと思ひ振り向くと、夏目工務店で働いていた人だ。名前は知らない。誰だろう？その人は私に言った。

「もう少し待てば、値引きのシールを貼る」

周りを見渡せば、そのシール待ちの人だろうか、数人の人がウロウロしていた。私も、ウロウロして時間をつぶし、その値引きのシールを張ったのを確認してから、その商品をカートのカゴに入れた。有り難し、チョット儲けた。田舎の人の助け合いの精神が通じ合った瞬間だった。

どっさり買って、家に帰り。台所の巨大な冷蔵庫に詰め込んだ。

休日過ぎ、月曜日、職場の昼休み、静岡新聞を見ると、新浜松市誕生記念ウルトラマラニック160kmそんな記事が目に入った。その記事には浜松市役所にゴールする数人のランナーの写真があった。あのときは、私が、そのランナーを見たのは土曜日、あれから夜をかけて走って行ったのか。世の中には、そんな人もいるのだな。

その新聞記事には、企画者萩田博と名前があり携帯番号もあった。私は昼休み、そこに電話した。そして、その人が企画する、天竜ウルトラマラニック42kmに参加したのだった。

浜松市の遠州鉄道、その西鹿島駅に朝9時に集合だと言う。私は車を二俣駅に止めて歩いて、その集合場所に行った。小さなオバサンがチョコを私にくれた。ヨッピーというそうだ。メガネをかけたオバサンはエッチャン、どちらも萩往還マラニック250kmの常連だと言う。普通の人と違う世界を感じた。

主催者、萩田さんが来て、みんなから其々自己紹介があり、走り出した。岩水寺方面から下阿多古、阿多古川沿いに熊平・道の駅くんま水車の里で昼食をとった。休憩後、そこから少し上に上って横川方面に下っていく、横川に辿り着き、天竜川がでたら、天竜川西岸を船明ダムまで下る。船明ダム堰堤を渡り遠州天竜舟下り乗船場がゴールとなる。そこから舟下り、電車で家まで帰ることができる人は、お酒も飲める。私は車だから、お酒は飲めない。下船場から二俣駅まで送ってもらい車で家まで帰ってきた。

次の年の北遠駅伝、水窪協働センターの控室で、萩田さんがいた。遠山郷でマラニックが始まる、そんな話をした。

第一回チャレンジマラニック③ 遠山郷

私は、その年の第一回東京マラソンに申し込みをして、落選の通知を貰ったところだった。遠山郷のマラニックは参加費一万。東京マラソンも参加費一万。当時、その参加費は高いと感じていた。今はマラソン大会の参加費は一万が当たり前前の時代になった。参加しない人は、お金を払ってまで走る人の気持ちは分からないだろう。

その年の春、遠山郷のマラニックに参加するために遠山の木沢地区の木沢木造校舎にかけた。白いBMWとワゴン車、どちらも横浜ナンバーだった。GOヒロミ似の方、サイショウジさん。少し太った方、トドさん。その二人が企画して誕生したマラニックだと言う。その人の仲間も明るく朗らかなメンバーが集まっていた。

前日雨が降り、ぬかるんだ木沢木造校舎の狭いグラウンドをランナーは一斉にスタートした。南アルプスの登山口、便ヶ島（聖光小屋）に手打ちそばのエイドがあると言う。それを目指して走った。要所要所に人が立っている。どうしてかな。と思った。あとで聴いたら落石を心配してのことだった。村の人に支えられてのマラニックだった。便ヶ島からの帰り、振り向けば雪をかぶった山がある。あれが聖だと一緒に走っていたタカノさんは私に教えてくれた。

ゴールは和田地区にある道の駅かぐらの湯、その温泉だ。マッタリ湯につかり、後夜祭はスズキ屋で大宴会だった。

前夜祭あり後夜祭あり、エイドは充実、これで一万円は安いと感じた。

次の年、そのマラニックは後夜祭に寿司の食い放題があった。それからコース沿いのエイドに豪華絢爛の二郎さんエイドが誕生した。年々そのマラニックは進化していった。

ある年、前夜祭を終え、木沢小学校に泊まった私は、次の朝、スタートの場所であるかぐらの湯の駐車場に行くと、車中泊のヨッピーに出会った。

「昨日は車がピーピー鳴ってうるさくて眠れなかった」と。

聞けばオオノさんがハイブリットカーで車中泊の時、車の警報が出て、それを止めることができなくて、一人四苦八苦していたと言う。

遠山の観光協会の会長が、飯田市の市議会議員になり、観光協会の会長が変わった。様々な事があつた。

チャレンジマラニック③ 遠山郷、だった。

2010（平成22）年、夢街道90kmは始まった。大きくなった日本で二番目に大きくなった市、浜松市、そこを縦断する。浜松駅から国道152号線を走り、旧天竜市、旧龍山村・旧佐久間町・旧水窪町、そこは長野県との県境にある。その峠「青崩峠」を越え、信州遠山郷をゴールとする90kmのマラニックなのだ。

そんな距離は走ったことがない。私は前の年の11月、キクチさんをお願いし、二人で一緒に、その道を走った。

初めての夜間走、夜走り。飯田線にゆられ、豊橋駅へ、そこでキクチさんと合流し、浜松駅へ、浜松駅前をキクチさんと一緒に夜9時スタートした。

旧天竜市、そのサークルK、そこを最後に店は無くなる。人気も無くなる。道の駅「花桃の里」そこでトイレ休憩、そこからはホタル舞う（入梅時だと）、真つ直ぐな国道152号線を走る。ユックリ話しながらのランニング、そこでの話が、何故か頭に記憶される。トンネルを二つ超えると秋葉ダムがある。秋葉ダムの堰堤を渡り、その公園で休憩、仮眠をした。それからは歩きも入ってくる。急がない慌てない、ユックリだけど歩み続ける。進み続けただけ、目標、遠山郷は近くなる。

大輪に向かう道辺りで急峻の山々が徐々に朝日に光輝いてくる。大輪橋が見える。ここから。国道1

52号線に合流する。そこを走ると山の斜面に張り付くような西渡の集落が遠くに見える。ああ佐久間に帰ってきたぞ、と思う瞬間がある。天竜川の川の向こうに電源開発の第二発電所の発電を終わった水が、私が暮らす半場からの水が流れ出ている。

西渡からは、八丁坂だ、塩の道だ。昔天竜川の川の港だった西渡、そこから塩を八丁坂の上にある街道まで背負子で持ち上げたという。そんな坂を上り、八丁坂峠を越え、林道を水窪川の西の斜面に張り付く斜面集落を辿りながら走る。

「瀬戸」「麻庄(ましよう)」「立原(たっぱら)」「横吹」「島」旧国道152号線に出て、水窪川沿いに北上し、相月バイパス、国号152号線の合流地点が「切開(きいなま)」私のオジイが妾と暮らした店「新聞商店」通称「エンテ」があったところ。

そこから北上、今は廃校になっている城西小学校が見える。芋堀の街がある。水窪の街がある。そこを超えると坂道がだんだんきつくなる。西浦「ハクリヤ」浜松市で一番北の端にある酒屋だ。

そこ西浦は西浦観音堂において国の重要無形民俗文化財の民俗芸能である「西浦田楽」がある地域だ。そこから上ること何キロだろう。池島、青崩峠と兵越峠の分岐がある、草木トンネル入り口がある。車の通れない幻の国道125号線を行く。青崩峠を目指す。途中「さば地蔵」があり「足神神社」「早太郎の墓」がある。大きな駐車場があり、そこに青崩峠に行く遊歩道がある。石畳の遊歩道を数分歩くと青崩峠だ。

そこから遠州方面の山なみを眺め、その手前の窪んだ所に水窪の街が見える。

昔、水窪からも信州の製糸工場へ出稼ぎに行った多くの女工さんがいたといえます。その人たちも、最後に水窪の町を振り返ったことでしょう。

映画「あゝ野麦峠」を観ました。最後、そんな女工達の一人「政井みね」は故郷の飛騨高山が遠くに見える野麦峠で息を引き取りました。そして、その映画の最後には、多くの女工さんたちが手を合わします。

過去があり、今がある。

そして明るい未来を、みんなでつくる。

都市部も山間部も

「夢街道90km」は第10回目で「夢街道CR」と名称を変え、参加者に北朝鮮拉致被害者の「救済会」バッチと静岡県骨髄バンクを推進する会のパンフレットを同封することにした。

また「夢街道CR」、そのCRとはカンントリーロードの意味だ。

私たち、佐久間中学校を1975年に卒業した人たちの同窓会は、佐久間町の浦川で清流荘での開催が45歳のときはできた。50歳でも、何とかできた。

しかし、地元での開催が難しくなると、55歳の同窓会は、浜松市街ホテルコンコルドになった。佐久間中学校同窓会75の貯金通帳も、浜松市佐鳴台で暮らす、同級生に渡し、私の思いを託した。その55歳のときの、ホテルコンコルドの同窓会は楽しかった。佐久間では遠いから。そんな人も駅近くのホテルだからと参加した人もいる。

私は佐久間から、さくまる君を連れて、そのホテルコンコルドに行った。受付で、そのヌイグルミをユキは被った。

ホテルコンコルドの宴会場からの浜松市の街並みが綺麗だった。初めて参加した人にサダトシがいた。私の記憶にある。その人はその人の、親父とよく似ていた。酒飲みで、ツマミは口にしない。中学生のとき城西にある焼肉屋で隣に来て酒を進められた。酒の一杯も飲めないで・・・。ベロベロだった。その息子サダトシも同窓会でベロベロになった、そのサダトシは、タクシーに押し込まれ帰って行った。

その次の年の冬、佐久間民話の郷会館駐車場で行われていた佐久間新そば祭り。そこで歩いているとサダトシの甥が私に、その人の訃報を知らせた。

何故、彼は、私に、それを伝えたのか。私にはわからない。

佐久間に帰ってきて、半場に暮らして、隣家の回覧板をいつも持ってきたオバサンが、突然亡くなったとの知らせを聞いて、村の葬式に初めて出て、それから多くの付き合いがあった。

佐久間町という地域、自殺する人がいた。若いあの人、歳を重ねた働き者だった人。事故もあった。旧原田橋の建設のときだ、トラックが川合側で天竜川に落ちた。新聞・テレビの取材だらうかヘリコプターが数台、佐久間の街の上空を音もけたたましく舞っていた。

平成27年1月31日、その建設途中の新原田橋が旧原田橋と共に、斜面崩落と共に崩れ落ちた。ちょうど、その年の佐久間駅伝が終わった次週の土曜日のことだった。そのとき市の職員も2人命を落とした。

私の兄は癌で、父親も癌で、母親は特別老人ホーム「さくまの里」に11年お世話になって、この世を去った。

私は、44歳のとき病氣した聖隷三方原病院に運ばれた、そして。その前日、同じ病氣でその聖隷三方原病院に運ばれた人は亡くなった。私は、今その人と同じ年齢になった。振り返ると長かったような短かったような気がする。

先日、「あした死ぬかもよ？」そんな本を読んだ、自分を客観的に見ることに、今現在、自分に起こっていること、悲しいとか怒りとか、それは過ぎてみれば、タダの思い出しではない。

その本の中で、いつか来る自分の死、その自分の死んでしまう、その日の前日の自分を想像し、今の自分に語りかける。そんな事が書いてあった。未来のことは分からない。だから自分は何時まで生きるのかと想像する。60歳の自分は80歳になった自分を想像して、今の自分に語りかけた。

「今まで様々な事があった。ご苦労様、こちらからも頑張れよ」と言った。

同じような話が、テリー伊藤さんの対談であった。その人は120歳の自分を想像して、今の自分に話しかけたという。またヤギノリさんは88歳だという。実際120歳88歳まで生きることができかわからない。それでも、あくまでも想像だから。今を楽しく生きたいから過去、まだわからないことは夢を持っていること。それをネットの寺子屋「朝礼だけの学校」では教えてくれているのではと思う。

希少価値、自分の価値を捜す。自分は佐久間で生まれて、佐久間で育った。今半場で暮らしている。そして今までの様々なことがある。

私は44歳のとき聖隷三方原病院から帰ってきて、介護福祉士の合格通知があった。

今、その介護福祉士登録証を履歴書に書いた。還暦から新しい職場に一歩足を踏み入れようとしている。

佐久間高校の庭の梅の花が咲いた。卒業生が植樹した二本の紅白の梅である。校門から歩き佐久間中学校体育館の前にある梅の木である。

そこから佐久間高校の校舎を見ると、その向こうに山がある。登ってみたかった山だ。前任者から、昔地元の人が佐久間高校の先生を連れて登って遭難したところのある山だから行かない方がイイ。と教えられた。

その山に3月5日(土)に登った。険しい山だった。山頂には反射板があった。
この山の名前は無い。川合ではこの一帯を「ゴンゲンの杜」というらしい。中部側では「わしん沢」というらしい。
その山の名前は分からない。

縁があり。萩田さん主催の森町三倉「勉強会」に参加した。そこで森信三先生の「修身教授録」そんな本の読書会を経験した。4年かかり、その本を読み終わり、コロナが世の中に脅威を放った、そんなとき「朝礼だけの学校」にネット寺子屋の門をたたいた。

そして、ZOOMで校長先生と話す機会を頂いた。そして自分なりに考えて62歳からの再就職を考えた。のだった。

母親が80歳から92歳まで、お世話になった特別養護老人ホームに再就職することに決めたのだった。19年前に介護の実習で御世話になった老人ホームで面接をしたのだった。

60歳になり自分の人生を振り返って自分史を考えていた。人生の棚卸をしていたのだ、ほんとうに良い機会だと思う。また、これを良い機会にするのは自分自身だとも思う。

今62歳、何ができるかは分からない、けど、自分なりに楽しい人生を歩んで行こうと思っている。そして、ココ佐久間で世界平和を訴えていこうと思っている。小さな争いはどこにでもある。そんな小さな争いも良くないことは良くない。とハッキリ言える人、そうでなくてはならないと思う。

ロシアがウクライナに侵攻した。罪もない一般の人を殺戮している。それは大人としてダメだと言わなければならない。しかし、日本に住む大部分の人は他人事と考えている。平和憲法9条を守れと言う意見もあるが、私には、日本だけ、今の時代に生きている人だけの平和を祈っているようにしか見えない。

桑原功一さんの「フリーハグ」そんな本が私の本棚にある。世界平和を考えている。私たち同年代の人も、本当の平和とは何か、考えるときが今ある。そのように感じるのです。

